

よい豚のもとをたどればよい種豚

サワディーピーマイ!!
本年もよろしくお祈いします!!



第 11 号 2020. 1. 17 発行

国産純粋種豚改良協議会だより

あけましておめでとうございます。養豚を取りまく状況について、疾病のそれは国内外で依然油断を許さない状況が続いています。しっかりとした飼養環境を整え、また情報交換も密に行い防疫に努めましょう。

令和元年度 通常総会開催 ~2019.12.18~

12月18日、令和元年度通常総会が、東京都渋谷区の婦選会館多目的ホールにて開催されました。

今回で第三回目を迎えた総会、星会長並びに農林水産省生産局畜産部畜産振興課の犬塚畜産技術室長から開会の挨拶を頂いた後、平成30年度の事業実績及び収支決算に関する報告、監査結果の報告、令和元年度事業計画及び収支予算についての説明があり、全会一致で承認されたほか、前年度の総会で承認された「銘柄豚認定検討委員会設置要綱」に基づき、銘柄豚認定に関する規則の案が提出され、承認されました。また桑原監事から、10月25日に種豚生産者連絡会として農林水産省局長に対し、「豚コレラに関する特定家畜伝染病防疫指針の一部変更に伴う要望書」を提出、農水大臣にも陳情したことを報告し、「今後、当協議会全体として活動が可能になれば力強いものとなる」とした上で緊急動議として提案され、全会一致で承認され議長預かりとし、今後の要望・内容等は、ワーキンググループで協議し、会員やオブザーバーに要請の可否の意思確認をしていくこととしました。



最後に、独立行政法人家畜改良センターの松本部長にご挨拶を頂き閉会となりました。

冒頭、星会長は挨拶で「この協議会は、設立当初から、日本全国の小規模なブリーダーも一緒に日本の種豚改良に貢献してもらい、日本国民の食文化に合った国産豚肉を生産することを大きな目標としてきた。ことは養豚の歴史の中で稀に見る激動の年となってしまい、来年もこのような状況が続くと思われるが、国産純粋種の改良は養豚がある以上、消費者がいる以上、食文化がある以上、取り組んでいかなければならない。国産純粋種は世界にも類をみない日本独自の豚肉だと信じている。今後も皆様にご協力いただき、未来永劫に繋がる日本の種豚改良に当協議会が尽力できるようお願いしたい」と述べました。

来賓の犬塚畜産技術室長からは「改良において産肉は向上、肉質は一定の評価がされているが、繁殖能力は海外より遅れている。CSF のワクチン接種もスタートし種豚・精液の流通制限のため、育種素材の導入や遺伝的能力評価のための血縁ブリッジ構築が従来どおり実施できなくなっている。ただし、この構築について、これまでも長年取り組んできたが、その成果は必ずしも芳しいものとはなっていない。また ASF によって遺伝資源である能力の高い種豚がいなくなるリスクもあり、凍結精液等を考えなければならない。その為この会でどのように考えているか議論したい。国では優良種豚の導入や種豚能力測定機器の導入補助、また、種豚・精液の円滑な流通化のためのマッチングも団体をお願いをしている。」と御挨拶を頂きました。

総会終了後、出席者で意見交換会を行いました。

そのなかでも特に CSF 関係で種豚及び種豚生産者をどう守るかなど意見が多く、CSF のワクチン接種県や風評被害により種豚生産者の経営が圧迫されているという声もありました。

桑原監事は「種豚生産者は生産者全体の 1~3%と少なく、声が届きにくい。しかしその生産者が実は、多種多様な日本の豚肉を支えている。日本人好みの豚肉、そして種豚を守れるように、種豚についてもっと考えて欲しい。」と提案、ほかにも全国的に種豚の数が足りていないという切実な声がありました。

肉豚生産者は、種豚があれば同じ経営を再開できるケースも多いですが、種豚生産者は一度遺伝子を失えば経営再開は非常に困難であり、全国の肉豚生産にも多くの影響を及ぼします。この会を通じて、国内で種豚を維持・改良することの重要性をさらに周知を行い、日本で豚肉生産することの必要性を消費者にもアピールしていきたいと思えます。

終了後は参加可能なメンバーでの懇親会も開催。普段なかなか意見交換もできない状況の中、深夜までみなさん色々な思いを交換されていました。

今回出席できなかった会員・オブザーバーの皆様、来年の総会では是非お会いしましょう。



国産純粋種豚改良協議会の現在の会員数は、生産者会員が 22 名、団体及び試験研究機関会員が当協会含め 14 名です。オブザーバー会員は 6 名となっております。正会員への変更手続き、新規入会をお待ちしています!!

申し訳ありません!!



もう少しお待ちください……

～お詫び・国産純粋種豚改良協議会専用データ管理システム 改修について～

今回の総会でもご報告致しましたが、協議会専用の遺伝的能力評価を抽出するプログラムに一部不具合等が有ることが判明し、現在その改修及び構築の作業を行っております。

こちらの作業が終わるまで、協議会内の遺伝的能力評価及びランキングの公表ができない状態となっており、皆様には大変なご迷惑をおかけしております。

しかし、皆様のデータについては引き続き受け付けていますので、是非最新の未報告データについては書式にてご提出もしくはご入力の方、よろしくお願いいたします。

只今、急ピッチで作業を進めております。もうしばらくお時間を頂きたく、何卒ご了承のほどよろしくお願いいたします。

国産純粋種豚改良協議会ホームページを近日一般公開予定です!!

このホームページに掲載する会員・オブザーバーの皆様からの『自慢の我が子(豚) 🍷』の写真を大募集中です。データを事務局まで是非お送りください。掲載希望の情報もお待ちしています。(E-Mail:n.yuasa@pig-pins.com 湯浅まで)

**中国及び
ベトナムほか東南アジアと朝鮮半島に拡散した
ASF と
東海から関東・北陸・沖縄地域まで広がっている
CSF の防疫強化を！！**

ASF は非常に厄介な病気で、国内への侵入は全力を挙げて阻止する
必要があります。また、豚コレラの拡散防止のため衛生対策を徹底しましょう

ASF ウイルスは中国及び東南アジア・朝鮮半島と拡散しており、いつ日本に侵入してもおかしくない状況です。国に対し、水際防疫の強化を要請していますが、国内養豚農場では防疫レベルを最高レベルに引き上げ、防疫強化をすぐに実施し国内への侵入を全力で阻止しましょう。

また、続発している CSF についても養豚経営の存続にも関わる疾病です。これ以上拡散しないよう農場の衛生対策を今一度確認いただき侵入防止に努めましょう。

**『種豚・精液、肥育もと豚等の
導入・販売でお困りの生産者の皆様へ』**

相談窓口を開設しました

国内で発生しております CSF 対策として昨年 10 月 25 日からワクチン接種推奨地域においてワクチン接種が開始されました。

これにより、ワクチン接種した種豚等は非接種地域への移動が出来なくなり、この影響で従来の取引先から種豚・精液、肥育もと豚等の導入・販売が出来ずに困っているという相談が多数寄せられています。

JPPA では、国産豚肉生産への影響を少しでも緩和するため、種豚・精液、肥育もと豚等の導入・販売に関してのご要望、ご相談をお受けし、可能な限り対応して参りますので、情報をお寄せいただきますよう、ご協力のほどよろしくお願い致します。

なお、頂いた情報は個人名等を除いた形で他団体等とも共有し、効果的なマッチングを図っていきたくと考えています。

つきましては、種豚・精液、肥育もと豚等のマッチング用情報提供用紙を作成しておりますので、事務局までご連絡ください。

また、現状の顧客以外に配布可能な豚等がございましたら、この取組の一助となりますので、事務局まで情報をお寄せいただきますようよろしくお願いいたします。(情報提供用紙は JPPA ホームページでも提供していません。)

●お問い合わせ等 窓口：国産純粋種豚改良協議会 又は
(一社)日本養豚協会 改良部



国産純粋種豚改良協議会 銘柄豚認定 始動します!!

第3回 国産純粋種豚改良協議会 通常総会において銘柄豚認定に関する規則が承認された事を受け、いよいよ国産純粋種豚改良協議会の銘柄豚認定が始動します。認定委員の皆様には今後、認定の詳細や申請書式などの作成を行って頂きます。少しでも早く本活動に着手できるよう、事務局も頑張りますので認定委員の皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

また、認定に関するご意見もお待ちしていますので、どしどし事務局まで送ってください。



第2回 豚改良増殖推進検討委員会 開催

11月5日(火)、第2回の検討委員会が農水省にて開催されました。国産純粋種豚改良協議会メンバーからは学識経験者でご指導頂いております、東北大学大学院の鈴木啓一教授、会員である農研機構の石井家畜ゲノムユニット長、家畜改良センター茨城牧場の新場長、千葉県畜産総合研究センターの鈴木室長、有限会社星種豚場の星正美氏、事務局を担当させて頂いている当協会専務理事の小磯孝が委員委嘱を受けています。今回は第1回の意見交換を踏まえて、農水省から現在の目標をどのように改正していくか等の説明があり、出席委員からのそれに対する意見発表と意見交換がありました。

そのなかでも、やはり我が国の種豚に求めるものは長命かつ全頭離乳が可能な産子数ではないか、また、肉質についても我が国独自の好まれる味を科学的見地にに基づきながら追求すべきではないか、という意見があり、まさに本協議会が目指す種豚改良と言えるのではないのでしょうか。

次回は1月29日(水)に開催されます。事務局では次期目標に盛り込みたいこと等、皆様から、豚改良増殖目標に対するご意見を募集致します。メール・FAX等にて事務局まで是非、お送りください。よろしくお願いいたします!!



事務局からのお知らせ

「国産純粋種豚改良協議会」は
平成28年3月31日、オールジャパンでの種豚改良を
目指して発足しました。只今、会員絶賛募集中です!!

★令和元年度 種豚導入補助事業 ご案内

事務局である一般社団法人 日本養豚協会では令和元年度も種豚導入補助事業の事業実施主体となりました。国産純粋種豚の能力底上げが目標の事業です。平成30年度も同様の事業があり、会員及びオブザーバーの方で事業参加されて、積極的に改良のための導入を行って頂きました。本事業は単年度事業ですが、平成26年度から続いている事業で、生産者間血縁構築にも有効に活用されています。せっかくの補助事業です。協議会の目標達成の為に是非、有効活用しましょう。お問い合わせは事務局の湯浅までお願いします。

★協議会内部での種豚交流について

改良のスピードアップの、ひとつの指標となる遺伝的能力評価精度向上を図るためには、協議会員間での血縁構築が重要となってきます。是非、会員間で種豚交流を実施しましょう。御連絡いただければ会員にお知らせいたしますので事務局までお願いします。

★会員、絶賛募集中!!

より多くの種豚生産者に参加していただくことで、国産純粋種豚改良協議会の活動が盛り上がり、かつ、データがたくさん集まり、改良のスピードアップも狙えます。是非、入会をよろしく願いいたします。協議会についてのお問い合わせもお待ちしています。

★産肉検定・豚人工授精師資格取得等について

産肉形質改良のための素材となるデータ測定についても、積極的に実施をお願いしたいところですが測定機器が無いなどのお悩みについて、協議会一丸となって取り組んでいきたいと思っております。また、最近非常に問合せが増えております、豚人工授精師資格取得や人工授精の講習会等、皆さんで情報交換を行いたいと思っております。是非、事務局へお問い合わせ下さい。全体で対策を検討したいと思います。

★国産純粋種豚改良協議会だより について

普段なかなか集まることのできない、会員及びオブザーバーの交流の場としても是非ご活用ください。掲載希望記事や掲載希望コーナーなどの御提案をお待ちしています。事務局までどんどんお寄せ下さい。また、改良に関する質問なども受け付けております。

(例:会員及びオブザーバーの紹介コーナー、会員及びオブザーバーに関するトピックコーナーなど)

特別寄稿～僕たちの失敗～

信州BBファーム 山下 哲生 2019年12月



12月2日、長野は例年より10日遅い初雪を迎えました。写真に写っているのは初雪ではありません。防疫のための石灰散布で、石灰に覆われた信州BBファームの農場です。遠くの山々は、雪帽子を被っています。

<2019年11月26日 午後>

信州BBファームの在庫豚は、種豚群30頭、子豚肉豚育成豚群200頭に対する豚コレラのワクチン接種が長野家畜保健衛生所の手により行われ終了しました。ワクチン接種地域に指定された長野県でも一番最後の接種農場となりました。

弊社では、種豚生産が事業のメインで、顧客は北海道から鹿児島まで全国です。精液も自農場の AI センターから全国に発送してきました。

この枠組みが、昨年からの岐阜県での豚コレラの発生、今春の愛知での大発生、そして7月、長野でのイノシシの豚コレラ感染、9月の県内養豚場での感染確認で情勢が大きく変わりました。

信州 BB ファームでの種豚生産及び販売の中止は、養豚雑誌等に広告しておきました。これに関しては、県外で3件ほど種豚の系統を維持増殖してもらうことを前提に話がまとまりかけていました。しかし、いずれも6月以降の豚コレラの急速な中部地区を中心にした拡大で中断、延期とされました。

決定的になったのは、豚コレラワクチン接種の「予防的」実施が全国ではなく感染確認県で決まったことです。そして、接種地域（＝県）からの非接種地域への豚の移動は、「感染がわからなくなる」ことから、禁止とされ、種豚のみならず、精液の移動も禁止されました。

その中で、夏以降は、種豚精液の販売がすべて止まり、在庫豚が増え、経営を圧迫していきました。その中で、種豚生産農場でも「高度に衛生体制が整備された、SPF あるいは実験農場に近い農場」は、接種を免除されかつ全国出荷できるとされました。

この規定に基づき、夏から農場の現場努力を柵の設置、石灰散布、作業動線明確化を表示した写真文章をおくり協議要請しました。それに対する農林水産省の回答は以下の通りです。

「高度の管理というのは、少なくともシステム化され管理手法や、閉鎖系での飼育が必要であると考えられる。それに該当しない施設はワクチン接種を免れないと考えてさしつかえない。ただ現時点でまだ農水省からの『高度な管理』に関する判断基準を明示することは出来ず、結論が出るまで時間がかかる見通しである。貴農場は設備的に高度の管理といえる状態になく、長野の隣接県すべてで陽性イノシシが浸潤している状況で判断保留のままワクチン非接種の状態を継続することは極めて問題がある。」

要するに、開放豚舎での種豚生産は、ワクチン接種地域では、非接種での全国出荷は認められないということになりました。

私達は、種豚生産者の仲間たちと全国でのワクチン接種の実施、それにもとづく種豚流通の実施を要求してきました。しかし結果は、実験豚舎、あるいは「完全」に外見上防御できそうなウインドレス豚舎以外は、国は認めていません。

今回、岐阜、愛知、長野と高度の防疫体制をとっていた飼養施設で相次いで感染が確認されました。また、完全なウインドレス豚舎でも発生は防げていません。疫学（感染の原因究明を行う病理学）でも全然解明できないものが多数でてきています。

「城は、多少ぼろでも、それを守ろうとする人たちの意思が強ければ、簡単には、落ちません。反対に、守る側が無理だ、もうだめかとも思うとどんな立派な防備を持った城もすぐに落ちる」といいます。今回の豚コレラの感染原因の多くは野生イノシシといわれます。しかしそれがどのように農場にウイルスを持ち込んだかは、解明されてません。

私は、1995年養豚の生産現場から生まれた「豚コレラワクチン」接種中止の運動の一翼を担わせてもらいました。

ただ、今この事態を迎え思うのは、「ワクチン」の呪縛から逃れられなかったという思いです。ワクチン接種中止を求める運動のキーポイントは、3つありました。

1. ワクチン接種は、豚コレラの撲滅を求めるもので、その全国接種の成果で国内で養豚場由来のウイルスはほとんどなく、接種の必要はない
2. 接種を早くやめないと、不顕性（症状がはっきり現れない）の慢性豚コレラがあらわれ、豚コレラの撲滅

をより困難にする

3. ワクチン接種が各都道府県ごとの縦割りで行われ、ワクチン接種の義務が利権化され畜産関連の外郭団体＝（私達はこれを『ザ・トンコレラ』と呼んだ）の肥大化に歯止めがかけられなくなる。また、都道府県ごとのバラバラの対応では、素早い効率的な防疫体制が組めない。そのためにも、豚コレラに対する防疫体制は、欧米並みに国家防疫として、都道府県という行政の枠を超えて中央の専門官の手で行うべき

しかし結局、ワクチンの接種中止の判断が各都道府県ごととなり、最後の鹿児島県がワクチン接種を中断するのに4年ほどかかり、この中で2、3の慢性豚コレラ、国家防疫の問題や議論は立ち消えとなってしまった。

この豚コレラのワクチン接種の問題は、深い傷跡を残し、これからも、日本の養豚業界を疲弊させる要因となる。その例を挙げれば、

1. 豚コレラによる殺処分、移動禁止による国内豚価の高騰の期待はかなえられなかった。 反対に、輸入豚肉が精肉売り場の半分近くを占めるようになり、消費者の輸入豚肉に対する抵抗も無くなり、一部では国産豚肉よりも高い輸入豚肉が現れている。
2. 目に見えないウイルスを相手にすることから、必要以上に警戒が強まり、生産者、流通業者の情報分断が強まり、それが結果として生産者の意欲を弱めた。結局、農水省の構想する「高度」な農場とは、工場生産に近いものとなり、農場の新設維持には莫大な資本が必要で、家族経営や新規就農での庭先での小規模養豚を不可能にして、規模拡大と工場化を産業の核としている。

ここで、信州 BB ファームも来春廃場を決意しました。限られたワクチン接種地域での種豚・精液販売がままならず、現在の母豚 20 頭の規模では肉豚生産では経営の維持が難しいと判断しました。それでも、貴重な英国黒豚 BB の血液を広めるべく、最終販売を行いたいと思います。

※山下氏は現在、当協会の会員及びオブザーバーではありません。これから協議会にも生産者として参加を検討して頂いておりましたが、今回非常に残念なことになってしまいました。同じ国産純粋種豚生産者として、同じ思いを持つ同士の山下氏の寄稿を掲載させて頂きました。

国産純粋種豚改良協議会 事務局 一般社団法人 日本養豚協会 担当:小磯・湯浅・神長

〒1510053 東京都渋谷区代々木 2-27-15 高栄ビル 2 階

電話:03-3370-5473 FAX:03-3370-7937 E-Mail:n.yuasa@pig-pins.com